台大日本語文研究第 24 期
2012 年 12 月，頁 149-174
2011-10-31 收稿，2011-12-06 通過刊登

指示詞習得的信念與學習策略之關聯性
—比較 JSL 學習者跟 JFL 學習者—

孫愛維*

摘要

本研究的研究對象爲 97 名 JSL 台灣日語學習者跟 189 名 JFL 台灣日語學習者，主要是探討學習者對於指示詞習得的信念、學習環境對其影響以及信念與學習策略之間的關聯性。研究結果發現在指示詞習得的信念方面共有 5 個因子，分別是「學習效力感」、「學習欲」、「文法知識學習的肯定」、「學習困難」、「自然習得的肯定」。而在學習環境所帶來之信念差異，JSL 學習者有較強的「學習效力感」以及「自然習得的肯定」的信念，而 JFL 學習者則有較強的「文法知識學習的肯定」之信念。而關於信念與學習策略之間的關連性，本研究發現，「學習效力感」、「學習欲」以及「文法知識學習的肯定」跟學習策略有正相關，而「學習困難」則跟學習策略有負相關。

關鍵詞：指示詞習得、信念、學習策略、學習環境、台灣日語學習者

* 開南大學應用日語學系助理教授

The Relationship between Beliefs and Learning Strategies toward the Acquisition Demonstratives: The Comparison between JSL and JFL

Sun, Ay-wei*

Abstract

This study was concentrated on the relation between beliefs and learning strategies about the acquisition of demonstratives by investigating 97 JSL students and 189 JFL students. As a result, “the self-effect of learning”, “the desire of learning”, “the confirmation of learning grammar knowledge”, “the difficulty of learning”, and “the confirmation of natural acquisition” were extracted. Moreover, when the influence of learning environment on beliefs was discussed, JSL students felt more “the self-effect of learning”, “the desire of learning” and “the confirmation of natural acquisition”. On the other hand, JFL students felt more “the confirmation of learning grammar knowledge” and “the difficulty of learning”. As for the relationship between beliefs and learning strategies, the beliefs of “the self-effect of learning”, “the desire of learning” and “the confirmation of learning grammar knowledge” had a positive correlation with learning strategies, while “the difficulty of learning” had a negative correlation with learning strategies.

Keywords: the acquisition of demonstratives, beliefs, learning strategies, learning environment, Taiwanese learners

* Assistant Professor, Department of Applied Japanese Language, Kainan University

指示詞の習得に関する信念と学習ストラテジーとの関連
—JSL 学習者と JFL 学習者との比較—

孫愛維*

要旨

本研究は、JSL 環境における台湾人日本語学習者 97 名と JFL 環境における台湾人日本語学習者 189 名を対象に、指示詞の習得において、どのような信念が存在するのか、それらの信念に JSL・JFL という異なる学習環境が影響するのか、そして信念と学習ストラテジーにはどんな関連があるのかについて、検討したものである。分析の結果、指示詞の習得に関する信念については、「学習効力感」、「学習意欲」、「文法知識の学習の肯定」、「学習困難」、「自然習得の肯定」という 5 因子が抽出された。次に、学習環境が信念に与える影響について分析した結果、JSL 学習者は、「学習効力感」、「自然習得の肯定」の信念が JFL 学習者より強い一方、JFL 学習者は「文法知識の学習の肯定」という意識が JSL 学習者より高いことが分かった。最後に、信念と学習ストラテジーの関係について探ったところ、「学習効力感」、「学習意欲」と「文法知識の学習の肯定」の信念と学習ストラテジーに正の相関、「学習困難」という信念と学習ストラテジーに負の相関があることが示された。

キーワード：指示詞の習得、信念、学習ストラテジー、学習環境、台湾人の日本語学習者

* 開南大学応用日本語学科助理教授

指示詞の習得に関する信念と学習ストラテジーとの関連
—JSL 学習者と JFL 学習者との比較—

孫愛維

一、はじめに

日本語指示詞「コ・ソ・ア」は初級段階から導入されるにもかかわらず、上級者でもしばしば誤用が見られるため（迫田 1998）、年齢、母語、学習環境などの多角的な視点から指示詞の習得研究が議論されている。他方、指示詞の習得研究において個人個人を見た場合には、習得結果にばらつきが多く見られ、個人差に影響されるとの指摘がなされている（宋・迫田 2004；林 2006 など）。しかし、これまでの指示詞の習得研究は、主にグループ全体の習得特徴を描写するにとどまり、学習者自身が指示詞の習得をどのように捉えているか、どのような方法で習得していくか、なおかつ両者の間にはどのような関連性があるのかという学習者の視点に立つ研究は十分とは言えない（安 2001；安 2008）。小柳（2004）にも指摘されているように、習得の全体像を捉えるには、習得過程の共通性と、学習者要因（学習の個人差を生む学習者の内面的な要因）を的確に把握する必要がある。

学習者要因には、性別、年齢、知能、適性、信念[1]、学習ストラテジーなどが含まれる。その中には、性別、年齢、知能など教師にはコントロールできない要因もあれば、信念、学習ストラテジーのように教師が学習者の学習を成功に導くために取り扱えるものもある。Sawyer & Ranta（2001）は効果的な教育を計画するためには、可変的な学習者要因に着目すべきことを挙げている。また、Horwitz（1988）と Yang（1999）は、学習者の信念と利用される学習ストラテジーを明らかにすることによって学習者に合った指導を考えてい

[1] Belief という言葉には、「信念」、「信条」、「ビリーフ（ス）」、「確信」、「言語教育観」などさまざまな訳語が当てられるが、本研究では「信念」と記す。

くことができるとし、学習者自身も自分の考え方と学習行動を客観的に把握することができ、自らの学習行動に内省する契機が与えられると主張している。上述の論説を踏まえると、指示詞の習得研究に信念と学習ストラテジーという学習者要因の観点を導入することで、指示詞の学習効果を高める手助けになり、指導のヒントにもなると考えられる。

以上の問題意識から、本研究では、日本国内で日本語を勉強している学習者（Japanese as a Second Language、以下 JSL）と、台湾で日本語を学習している学習者（Japanese as a Foreign Language、以下 JFL）を対象に質問紙調査により指示詞の学習・使用に関する信念と学習ストラテジーを学習者要因として検討することを目的とした。

二、先行研究と研究課題

（一）信念

学習者の信念とは、学習者が言語学習に対して意識的・無意識的に所持する態度、考え方及び意識である。信念の調査には、様々な観点から多くの研究がなされているが、その多くは Horwits（1987）の開発した BALLI（Beliefs about Language Learning Inventory）という質問紙を援用している。BALLI は言語学習に対する適性、言語学習の難易度、言語学習の性質、コミュニケーション・ストラテジー、言語学習の動機という 5 領域から構成されており、合計 34 項目である。Horwits（1987）の BALLI が利用され、台湾人日本語学習者を対象とした研究には服部（2002）、佐藤（2007）と盧（2011a）などがある。

服部（2002）は、効果的な教育を行うための手がかりとして、台湾大学の学生に言語学習に関する信念の調査[2]を行い、台湾大学の学生はどのような信念を持っているのか、それは学習期間による変化

[2] 服部（2002）では、Horwits（1987）による BALLI に修正を加えた岡崎（1996）の質問紙を使用するため、全部 44 項目である。

が見られるのか、について考察した。調査の結果、学生は授業より自然習得的な方法の方が学習効果があると信じる、初期から正確さを重視する、単調な学習及び練習に対する忍耐力が強いなどの傾向が見受けられた。また学習期間による変化が見られなかったことから、学生は基本的に言語学習に対する一貫した信念を持っているとしている。なお、慈済大学の学生を対象とした佐藤（2007）[3]でも、これらの結果と類似した結果が報告されている。

台湾の大学 9 校から大学 3 年生を集め調査を行った盧(2011a)[4]は、台湾大学生の信念について以下の結果を挙げている。①初期から正確さへのこだわりが強く、誤用の訂正が求められる、②実力は文法積み上げ型による養成される、③多量の反服練習と暗記学習を支持する、以上の 3 点である。

一方、BALLI を援用して調査を実施した板井（2000）と Tanaka & Ellis（2003）では信念が学習環境に左右される可能性が示唆されている。中国人学習者の日本語学習に対する信念を調査した板井（2000）では、学年による信念の違いが検出されている。そのような結果が得られた理由としては、学習者が日本で語学留学を経験したことが要因であると推定されている。しかし、著者自身も指摘しているように、学年間にもともと信念の違いがあったという可能性を否定できないので、直ちに学習環境による信念の差が出るという結論は導かれないと思われる。また、Tanaka & Ellis（2003）においても留学前後のデータを比較することによって、留学後、英語学習者が経験的言語学習に対して肯定的になり、かつ自己言語能力に対する自信が高まるという結果が得られている。以上のことから、第二言語環境（目標言語が身のまわりで日常的に使われている環境）・外国語環境（目標言語が身のまわりで日常的に使われていない環境）といった異なる学習環境は信念の決定に影響を及ぼすと推察される。

[3] 佐藤（2007）で利用される BALLI は、教師の役割、教室活動、言語学習と文化、学習者の自律性という領域を付け加え、全部 67 項目である。

[4] 盧（2011a）は Horwits（1987）の BALLI を参考し、教師の役割、媒介語、教授法・教室活動、言語学習と文化の関係についての項目を作成し、全部 45 項目である。

しかし、一つのグループの留学前後のデータを比較するのみで得られた信念の変化は、学習環境に起因するものか、それとも時間の推移と言語能力の向上を要因とするものなのかを見極めることが難しいと思われる。結果の違いが学習環境に起因するものであるかどうかをより正確に検証するために、第二言語学習者と外国語学習者を同時に研究対象として調査する必要がある。

なお、板井（2000）と Tanaka & Ellis（2003）の研究は言語学習全体を取り扱うものであり、特定の文法項目に特有の信念について、細部にわたり詳しく調査するものではない。Barcelos（2003）は項目、学習環境によって学習に関する信念が異なるため、調査を行う際は、研究項目を漠然とした抽象的なものではなく、具体的かつ特定的なものに限定し、異なる学習環境に置かれる対象者の信念を考察すべきであると指摘している。そうだとすれば、日本語の指示詞の学習において、どのような信念が存在しているか、また、一般の言語学習に関する信念と同じく、学習環境が指示詞の学習に関する信念に影響を及ぼすのか、即ち、JSL 学習者と JFL 学習者との間に指示詞に関する信念の差があるのかどうか、という点に関して疑問が生じる。

（二）信念と学習ストラテジーとの関連

学習ストラテジーについて、Oxford（1990）は「学習をより易しく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的に、そして新しい状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動である」と定義づけている。信念は学習ストラテジーを決定する要因であるとの諸報告がある（Bialystok 1981；Horwitz 1987, 1988；Nyikos & Oxford 1993；Oxford 1990；Wenden 1987；Yang 1999；盧 2011a, 2011b）。例えば、Rubin（1987: 19）では「信念は学習ストラテジーの選択と使用の基礎をなす」という指摘がなされている。Wenden（1987: 109）も「言語学習の重要性を信じる学習者が、言語の特定項目を理解し記憶することを支援する認知的ストラテジーを使用する傾向にある」と述べている。Ellis（1994: 473）も、信念などの学

習者要因、学習ストラテジー及び学習成果は双方向に影響し合うと述べている。以上のことから、信念は学習ストラテジーの使用に影響を与える可能性が浮き彫りにされている。以上の主張に関してBALLI と SILL[5]という質問紙調査を実施し検証したのは、Yang（1999）と盧（2011b）である。Yang（1999）は、英語学習において信念と学習ストラテジーとの関連を調査し、盧（2011b）[6]は日本語学習における信念と学習ストラテジーとの関連を調査した。その結果、英語学習には自己効力の信念（self-efficacy about learning English）と学習ストラテジーの使用に正の相関があり、英語学習への自己効力の信念が学習ストラテジーの使用を促すことにつながることが示唆された。以上の分析結果から、Yang は教師が積極的に学習者の信念を高めたり、学習ストラテジーの使用を励ましたりすることによって学習者の学習動機を喚起することができると結論づけた。盧（2011b）でも、Yang の結論と類似した結果が得られ、日本語学習に対する信念が学習ストラテジーの選択に影響をもたらすことが確認された。

しかしながら、Yang（1999）と盧（2011b）の研究は言語学習全体を調査したものであり、特定の文法項目に関する信念と学習ストラテジーとの関連を突き詰めて検討するものではない。言語学習の一般の信念と学習ストラテジーとの関係を解明すると同時に、特定の文法項目に即した信念と学習ストラテジーとの関わりの研究も必要であろう。以上の論述を指示詞の習得研究に当てはめると、信念と学習ストラテジーとの関係についてはまだ明らかにされていないと言えよう。

一方、指示詞の習得研究では、質問紙調査による指示詞に関する

---

[5] 学習ストラテジーを調査するために、Oxford（1990）が SILL（Strategy Inventory for Language Learning）という質問紙を開発した。この質問紙は、記憶ストラテジー・認知ストラテジー・補償ストラテジー・メタ認知ストラテジー・情意ストラテジー・社会的ストラテジーという 6 つの学習ストラテジーに基づく 50 問から構成されている。

[6] 盧（2011b）は、Horwits（1987）による BALLI と Oxford（1990）の SILL に修正を施し、信念は 30 項目、学習ストラテジーは 35 項目を作成した。

学習ストラテジーを調査した孫（2010, 2011）がある。孫（2010, 2011）では、自分と他人の指示詞の使用に注意を払う「注意」、文法の参考書を読んだり、練習問題をやったりする「文法知識重視」、誤用を犯す場合、問題を解決しようとする「問題解決重視」、積極的に日本語を使うことによる「意思伝達重視」という 4 因子が抽出され、学習ストラテジーの使用頻度は JSL と JFL という学習環境に左右されるという結果が得られている。しかし、信念と学習ストラテジーという両者の関係を包括的に捉えた指示詞の習得研究は管見の限り見当たらない。指示詞の習得に関する信念と学習ストラテジーとの結びつきを明らかにすることは、指示詞の習得全体像を解明することに貢献できると考えられる。

そこで、本研究は孫（2010, 2011）の結果に引き続き、学習ストラテジーを支配する原因と見なされる信念を検討し、指示詞習得における信念と学習ストラテジーとの結びつきを解明することを目的とする。

（三）研究課題

以上の問題意識を踏まえ、本研究は JSL・JFL という異なる学習環境において初級後半から上級レベルの台湾人日本語学習者を研究対象に、指示詞習得においての信念と学習ストラテジーとの関連について調査を試みる。具体的な研究課題は次のように設定した。

研究課題①指示詞の学習において、どのような信念があるか。

研究課題②指示詞の学習において、学習環境は信念に影響を及ぼすか。

研究課題③指示詞の学習において、信念と学習ストラテジーとは関連があるか。関連があるとしたら、学習環境はその関連に影響を及ぼすか。

三、研究方法

（一）調査手続き

研究対象者の日本語能力を判定する SPOT[7]と「指示詞コソアに関する文法テスト」[8]を実施した後、指示詞の習得に関する信念・学習ストラテジーに関する質問紙調査を行った。質問紙には、普段の指示詞学習についての考え方、意見及び学習方法を答えるように指示した。また、研究対象者には回答に対する防衛や、調査者に良い印象を与えようとする意図が働くため、自己報告の際に虚偽の回答をする可能性が否めない。従って、本調査の結果が成績に影響せず、担任の教師は調査の結果を見ない旨を、研究対象者に予め伝えた。

（二）研究対象者

JSL：本研究では、日本に留学してから本格的な日本語学習を開始している台湾人日本語学習者のみを JSL 学習者として調査を実施した。SPOT の点数 20 点以下の被験者と回答が不完全なデータは除外した。SPOT の得点が 20 点以下の対象者を除外したのは、ある程度の日本語能力がないと、「指示詞コソアに関する文法テスト」に使用される語彙と文型の理解が困難であると想定したからである。その結果、回収した 132 名の中で、有効回答数は 97 名となった。日本語学習年数は 10 ヶ月から 3 年までである。

JFL：調査実施の時点で日本語学習年数が 1 年半から 3 年半までの、台湾の大学で日本語を専攻する 2 年生から 4 年生の学生で、人数は計 246 名であった。そのうち、回答不完全、SPOT の点数 20 点以下の被験者を取り除いた結果、有効回答数は 189 名となった。

日本語能力を測定するため、SPOT を実施し、JSL・JFL の SPOT

---

[7] SPOT（Simple Performance-oriented Test）は、筑波大学で開発された日本語能力を測定するテストである。「どうぞよろ（　）く」のように、1 文中の文法項目の 1 箇所にひらがな 1 字分を欠落させた問題文を示し、音声テープを聞きながら、穴埋めさせるものである。短時間で学習者の日本語能力を正確に測定することができるとされるため、広く使用されている。複数のバージョンがあり、本研究は問題文の難易度の幅が広い DE バージョンを利用した。

[8] 指示詞コソアに関する文法テストは、日本語母語話者 27 名の判定で指示詞の選択が一致した 35 問の三肢選択問題である。具体的な例は添付資料を参照されたい。

得点に対して t 検定を行った結果、統計的に有意な差はなく（t(284) =0.70, n.s.）、両群の日本語能力は同等のレベルであると仮定できる。なお、平均日本語学習歴は、JSL 学習者は 19.73 ヶ月、JFL 学習者は 32.88 ヶ月である。学習者の SPOT の得点結果及び日本語学習歴を表 1 に示す。

表 1　JSL・JFL 学習者の SPOT 得点（満点 60 点）と学習歴

	人数（性別の内訳）	最大値	最小値	平均値	標準偏差	学習歴（月数）
JSL	97（男 26・女 71）	60	20	39.40	10.87	19.73
JFL	189（男 39・女 150）	59	20	38.50	10.14	32.88

（三）調査材料（質問紙の内容）

指示詞に関する信念については、尺度が確立されていないため、質問紙作成に先立ち、調査対象外の JSL 学習者 5 名と JFL 学習者 3 名、計 8 名に指示詞の学習と使用についてインタビューを行った。インタビューの内容を基盤にして、Horwitz（1988）、安（2001）と向山（2007）を参考にし「指示詞に関する信念」は 35 項目、「指示詞に関する学習ストラテジー」は 20 項目を作成した。質問紙の作成に当たっては、質問項目が誤解なく解釈され、容易に回答できるものとなるように心掛けた。これらの質問項目は 5 段階評価で回答を求めた。本調査に先駆け、日本語学習者 3 名（JSL 学習者 2 名、JFL 学習者 1 名）に予備調査を実施し、分かりにくいという指摘のあった表現を修正した。日本語による読み誤りを防ぐため、質問項目の内容には研究対象者の母語である中国語を使用した。

（四）分析方法

本研究は、まず各質問項目の相関関係を共通の要因に縮約するために、統計ソフト、SPSS15.0 による因子分析を行った。JSL と JFL 別に因子分析を行った結果、両群の因子構造がほぼ同様であるため、JSL・JFL 両群を一緒にして因子分析を行った。分析手法は主因子法、バリマックス回転を採用した。次に、JSL と JFL といった学習環境

の相違が指示詞に関する信念に与える影響を探るために、抽出された因子ごとに、JSL・JFL それぞれの尺度得点の平均値と標準偏差を出し、その差の有無を検定するために t 検定を行った。最後に、抽出された個々の信念と学習ストラテジーの関係を相関によって探った。

四、結果と考察

（一）研究課題①の結果と考察

因子分析の結果は次のページの表 2 の通りである。因子数の決定については、固有値 1 以上の基準を設け、更にスクリープロットによる判断及び因子の意味的まとまり、解釈のしやすさという点も考慮して因子数を 5 に決定した。次に、共通性が.40 に達しない項目と因子負荷量が.35 以上のものが 2 つ以上わたっている項目、計 9 項目を除外し、26 項目に対して再度因子分析を行った。その結果、5 因子全体の累積寄与率は 62.79％であった。最後に、各因子のクロンバックのα係数[9]を算出したところ、「学習効力感」では.767、「学習意欲」では.838、「文法知識の学習の肯定」では.885、「学習困難」、では.879、「自然習得の肯定」では.822 であった。従って、いずれも十分な内的な一貫性が確認された。

表 2　指示詞に関する信念の因子分析結果

	番号と質問内容	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
学習効力感	27.有効に指示詞を学習する方法を知っている。	.905	.051	-.007	-.100	.078	.837
	26. 時間が経つにつれて指示詞能力は向上すると思う。	.879	.095	-.046	-.131	.033	.802
	28. 私は日本語指示詞をどう学習すればいいか分かっている。	.871	.069	.016	-.094	.121	.786
	25. 自信を持って「コ・ソ・ア」を使い分ける。	.843	-.073	-.036	-.089	.054	.728
	24. 自分の日本語指示詞のどの部分を改善するべきか分かっている。	.710	.055	.020	-.013	-.020	.508

[9] クロンバック（cronbach）の α 係数は信頼性を示す係数である。

	21. 自分なりに日本語指示詞の使い分けの基準を持っている。	.671	.047	-.007	.022	.011	.453
	30. 中国語の指示詞と日本語の指示詞の相違点を明確に指摘できる。	.665	.-013	.063	-.064	.129	.468
	33. 日本語の「コ・ソ・ア」を使用する時、中国語の「這・那」を当てはめる。	-.620	.086	.102	.239	.087	.467
学習意欲	19. 日本語指示詞が上手に使えるように勉強したい。	.032	.755	.115	.052	-.120	.602
	3. 日本語指示詞を使いこなすため、習った指示用法を実際に使うことが必要だ。	-.009	.754	.103	.092	.012	.588
	20. 私は日本語指示詞を日本人のように使いたい。	.096	.739	-.006	.043	-.057	.560
	18. 伝達において、日本語指示詞の役割が重要である。	-.025	.645	.268	.263	.055	.561
	2. 指示詞の使用に当たって、日本語指示詞を取り巻くコンテクストを正確に把握する必要がある。	-.059	.653	.207	.129	-.004	.489
	12. 日本語の生のインプットに多く触れることによって、日本語指示詞の学習を促進することができる。	.133	.595	.003	-.008	.072	.377
	1. 日本語の学習に指示詞は重要な学習項目である。	.012	.577	.372	.221	-.036	.522
文法知識の学習の肯定	10. 正しい日本語指示詞の文法知識が分かれば、正しく指示詞を使用することが可能である。	.050	.087	.880	.180	-.060	.820
	11. 正しい日本語指示詞の知識を身につけるために、指示詞の宿題を多くやる必要がある。	.062	.148	.871	.116	-.067	.803
	9. 正しい日本語指示詞の知識を身につけるために、定期的に指示詞を復習する必要がある。	-.037	.234	.782	.200	-.163	.735
	8. 正しい日本語指示詞の知識を身につけるために、体系的な指導が必要だ。	-.130	.204	.712	.142	-.185	.620
学習困難	15. 正確に日本語指示詞を使用することが難しい。	-.186	.110	.145	.890	-.024	.860
	16. 「コ・ソ・ア」の使い分けは教科書で習ったルールより複雑である。	-.095	.214	.153	.814	-.026	.742
	14. 日本語指示詞の学習が難しい。	-.122	.123	.237	.799	-.010	.725
	17. 正しい日本語指示詞の知識があっても、会話、あるいは文章を書くとき誤用になる場合がある。	-.198	.332	.185	.669	.046	.634
自然習得の肯定	5. 日本語指示詞に関する指導がなくても、たくさんの例文と接触するうちに分かるようになる。	.087	-.029	-.142	-.002	.938	.908
	4. 日本語指示詞は日本語を聞いたり読んだりするうちに、自然と身につく。	.086	-.034	-.148	-.049	.908	.857
	6. 新しい日本語指示詞の用法があったら、前後の文脈からその意味を類推することができる。	.118	.001	-.080	.002	.874	.783

	寄与率（%）	17.78	14.38	10.95	10.35	9.33	
	累積寄与率（%）	17.78	32.16	43.11	53.46	62.79	
	クロンバックα係数	.767	.838	.885	.879	.822	

次に、各因子に高い負荷を示す項目の内容から、因子の命名について検討した。

第 1 因子は、「有効に指示詞を学習する方法を知っている」、「時間が経つにつれて指示詞能力は向上すると思う」、「私は日本語指示詞をどう学習すればいいか分かっている」などが上位にきている。これらは指示詞に関する学習方法に自信を感じており、勉強すれば指示詞能力が上達するという楽天的で明るい見通しを持っているものであることがわかる。そこで、「学習効力感」と名付けた。これについては、Yang（1999）でも一般言語学習への自己効力という信念が見出され、本研究の報告と軌を一にしている。

第 2 因子は、「日本語指示詞が上手に使えるように勉強したい」、「日本語指示詞を使いこなすため、習った指示用法を実際に使うことが必要だ」、「私の日本語指示詞の使用は日本人のようになりたい」など指示詞の学習への積極的な取り組みと姿勢を表す 7 項目が高負荷を示した。そこで、第 2 因子を「学習意欲」と見なした。

第 3 因子は、「正しい日本語指示詞の文法知識が分かれば、正しく指示詞を使用することができる」、「正しい日本語指示詞の知識を身につけるために、指示詞の宿題を多くやる必要がある」、「正しい日本語指示詞の知識を身につけるために、体系的な指導が必要である」などから構成されており、指示詞の知識を身につけるにあたって、文法知識の役割を積極的にかつ肯定的に捉えている意識であると解釈できるため、「文法知識の学習の肯定」と命名した。同様の報告は他の研究もなされている。例えば、Kern（1995）、板井（1999）と盧（2011a, 2011b）も言語学習者が特に文法の学習を重視していると述べている。

第 4 因子は、「正確に日本語指示詞を使用することが難しい」、「『コ・ソ・ア』の使い分けは教科書で習ったルールより複雑である」、

「正しい日本語指示詞の知識があっても、会話、あるいは文章を書くとき誤用になる場合がある」などから、日本語指示詞を学習する過程では挫折を感じるという項目である。総括して、「学習困難」とした。日中の指示体系は極めて複雑に対応しているので、指示詞は中国語を母語とする学習者にとって習得が困難な文法項目である（単 2003）。この議論に関連する研究には、中国人学習者の指示詞使用意識を質問紙によって調査した安（2001）と単（2003）がある。両調査では、中国人学習者は初級段階から指示詞の習得を難しいと捉え、その傾向は上級者になっても依然として変化しないことを明らかにしている。

第 5 因子は、「日本語指示詞に関する指導がなくても、たくさんの例文と接触するうちに分かるようになる」、「日本語指示詞は日本語を聞いたり読んだりするうちに、自然と身につく」、「新しい日本語指示詞の用法があったら、前後の文脈からその意味を類推することができる」、という三つの項目から成る。自然環境に置かれた中で、帰納的学習の有効性を認めているので、「自然習得の肯定」と命名した。これに関しては、服部（2002）でも、台湾大学生は教室でのフォーマルな授業に依存するよりも、生の日本語に接する自然習得的な方法に、より学習効果があるという信念を持っているという報告がなされ、本研究と同様の結果が導かれている。また、指示詞の有効学習方法についての自由記述には、「指示詞を多く使えば使うほど上達になりやすいと思う」、「指示詞に触れ、実際に使用する経験をたくさんすることだと思う」といった回答が最も多く見られ、「自然習得の肯定」との関連が強くうかがえると共に、指示詞を使う環境を重視する構えが垣間見られる。つまり、教室外でも指示詞使用環境を作ることの大切さは認識していると言えよう。

以上の研究課題①「指示詞の学習において、どのような信念があるか」に対しては、「学習効力感」、「学習意欲」「文法知識の学習の肯定」、「学習困難」、「自然習得の肯定」という 5 因子を導き出すことができた。

（二）研究課題②の結果と考察

次に、JSL・JFL という学習環境の相違により、指示詞の習得に関する信念に差があるのかについて検討するため、5 因子ごとに JSL・JFL の尺度得点の平均値と標準偏差を出し（表 3）、t 検定を行った。その結果、JSL 学習者の方が JFL 学習者より有意に「学習効力感」（t（284）=8.05, p<.001）、「自然習得の肯定」（t（284）=2.48, p<.01）という意識を持つ一方、JFL 学習者の方が JSL 学習者より多く「文法知識の学習の肯定」（t（284）=3.09, p<.01）、「学習困難」（t（284）=2.24, p<.01）を感じる傾向が見て取れ、学習環境の相違は指示詞に関する信念の強さにかかわることが明らかにされた。

表 3　JSL と JFL の信念の比較

	学習効力感		学習意欲		文法知識の学習の肯定		学習困難		自然習得の肯定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
JSL	3.03	0.81	4.38	0.46	3.61	0.93	3.83	0.92	3.24	0.95
JFL	2.33	0.63	4.36	0.48	3.94	0.68	4.05	0.64	2.96	0.82

（平均値の満点は 5、網掛け部分は有意差のある部分である）

研究課題②の結果から、日常的に日本語を使用する JSL 学習者は、多様な使用経験から、自分の現在の指示詞能力がどのような状態なのかを判断しやすく、結果として自分の学習方法に高い効力感を感じており、この調子で勉強すればきっと今後も指示詞能力は伸びるだろうと自信を持つに至ることが明らかにされた。他方、JFL 学習者は、教室外で日本語を聞いたり、話したりする機会が少なく、日本語に触れる場合が限られている。それゆえ、自分の指示詞の正しさや誤用に気づきにくく、指示詞能力の向上を確認するのが難しいことから、徐々に指示詞に関する「学習困難」の意識が形成されていくと考えられる。李（2003）は、JSL 学習者は JFL 学習者より現在の日本語能力及び今後の日本語能力についてより肯定的に予測することを挙げている。なお、Tanaka & Ellis（2003）と堀越（2010）

でも、留学によって学習者が自身の言語能力に対して自信を高めるという結果が得られており、本研究と一致した結果が見られた。以上から、「学習効力感」と「学習困難」との間には負の相関が存在する可能性が示唆される。そこで、「学習効力感」と「学習困難」との相関を調べたところ、負の相関があった（r = -.273, p< .01）。つまり、指示詞に関する学習方法と今後見込まれる指示詞能力に自信を持つほど、指示詞は習得しにくいものとは認識していないと思われる。

続く、「自然習得の肯定」と「文法知識の学習の肯定」の信念についてだが、日本で生活している JSL 学習者は、多くのインプットに触れることができる好都合な環境に置かれているため、たくさんの例から指示詞の文法規則を拾い出すことができる。そのため、帰納的学習の可能性を認め、自然習得をより容易に肯定的に受け止めていると考えられる。逆に普段限られた時間や場所でしか生のインプットに接する機会のない外国語環境に置かれている JFL 学習者は、練習問題を書いたり、文法書を読んだりして、指示詞に関する文法知識に取り組むことを重要視し、文法知識の役割を肯定的に認めていると推察される。Charkova & Halliday（2011）にも、利用可能なインプットが制限される外国語学習者は主に教材に頼って文法規則を学習するため、文法規則の暗記と学習の重要性を重視する傾向が窺えるという指摘が見られる。これは本研究の JFL 学習者と類似した傾向であると言える。また、第二言語学習者と外国語学習者の文法指導に関する考え方を比較対照した Lowen, Li, Fei, Thompson, Nakatsukasa, Ahn, & Chen（2009）でも、外国語学習者が第二言語学習者より文法指導を重視していたことが見出されている。以上の結果をつなぎ合わせると、第二言語学習者に比べて、外国語学習者は文法知識の重要性を評価しているという傾向が浮き彫りにされる。そして、「自然習得の肯定」と「文法知識の学習の肯定」との相関を検定した結果、負の相関があった（r = -.267, p< .01）。つまり、「自然習得の肯定」の信念が強い学習者は文法知識の役割を消極的に受け止める傾向があると窺われる。

一方、「学習意欲」という信念には学習環境の違いによる差が見られなかった。平均値から見ると（JSL: 4.38、JFL: 4.36）、学習環境を問わず両者とも積極的に指示詞の学習に取り組む意識を持っていることが分かった。つまり、台湾人日本語学習者は指示詞習得について極めて積極的に勉強しており、上達しようとする強い意識を持つ傾向は、異なる学習環境によっても基本的には揺らいでいないと言えよう。

この結果はどう考えられるであろうか。学習環境による差が見られた信念と、見られなかった信念があるという結果から、学習環境が影響を与える信念とそうでない信念がある可能性を示している。JSL 学習者は、日常生活で日本を使う環境にいるので、周りの人々と容易にコミュニケーションが取れるために、積極的に日本語能力の向上を促す意識が生み出されたのではないかと考えられる。これに対して、JFL 学習者は日本語に触れる機会が制限されているものの、その欠乏感を埋めるために、早く日本語が上手になりたいという希望があることから、積極的に学習へ取り組む意識が徐々に形成されると推察される。韓国人学習者を対象とした李（2003）も、JSL 学習者と JFL 学習者共に学習への取り組みが積極的であり、本研究と同様の結果を示している。

（三）研究課題③の結果と考察

5 つの信念と孫（2010, 2011）で抽出された学習ストラテジーとの間に関連性が認められるかを検証するために、相関という統計手法を適用した。結果、JSL と JFL と共に「学習効力感」と「学習意欲」の信念と全ての学習ストラテジー、「文法知識の学習の肯定」という信念と「文法知識の重視」という学習ストラテジーの間には正の相関が見られた。一方、「学習困難」という信念と「問題解決重視」という学習ストラテジーとの間には、負の相関が見られた。また、「自然習得の肯定」という信念は、全ての学習ストラテジーとの間に相関は示されなかった。

以上の結果をまとめると、表 4 のようになる。

表 4　信念と学習ストラテジーの関係

JSL						JFL					
学	信念					学	信念				
	効	欲	法	困	自		効	欲	法	困	自
注	.48**	.29**	.09	-.13	.03	注	.48**	.32**	.08	-.04	.04
文	.43**	.26**	.35**	-.05	.09	文	.49**	.15**	.17**	-.04	.01
問	.53**	.21**	.02	-.15*	.02	問	.51**	.24**	.06	-.14*	.05
意	.52**	.22**	.06	-.05	.12	意	.55**	.23**	.09	-.02	.04

（学：学習ストラテジー、注：注意、文：文法知識の重視、問：問題解決重視、意：意思伝達重視、効：学習効力感、欲：学習意欲、法：文法知識の学習の肯定、困：学習困難、自：自然習得の肯定、網掛け部分は相関関係が有意な部分である）

以上のことから、本研究は JSL と JFL という学習環境の異なりにかかわらず、自分自身の指示詞能力と学習方法を肯定し、早く指示詞の使用能力を向上させたいという意識が強ければ強いほど、自発的かつ積極的に指示詞の学習を自ら計画し、それを実施する傾向にあることが明らかになった。また、文法知識の役割をポジティブに捉える学習者ほど文法知識の学習に努力していると推測される。そのために、「文法知識の学習の肯定」という信念と「文法知識の重視」という学習ストラテジーの間には正の相関が見られたのであろう。この結果は、英語学習者を対象にした Yang（1999）においても同様であった。Yang（1999）では英語学習への自己効力の信念（self-efficacy about learning English）と英語学習の重要性を認め、英語能力を向上させたいとする信念（perceived value and nature of learning spoken English）が、学習ストラテジーの積極的な使用へ導くという結果が得られている。

一方、「学習困難」という信念と「問題解決重視」という学習ストラテジーとの間には、負の相関が見られ、それ以外の学習ストラ

テジーの間にも、統計的には有意ではなかったものの、負の相関が認められた。つまり、学習困難感を持つ学習者ほど、努力をあきらめ全般的に自律的な学習をしていないものと思われる。そのために、「問題解決重視」の学習ストラテジーとの間にも負の相関が見られたと考えられる。

五、まとめと今後の課題

本研究は、JSL 環境における台湾人日本語学習者 97 名と JFL 環境における台湾人日本語学習者 189 名を対象に、指示詞の習得において、どのような信念が存在するのか、それらの信念に JSL・JFL という異なる学習環境が影響するのか、そして信念と学習ストラテジーにはどんな関連があるのかについて、検討したものである。分析の結果、指示詞の習得に関する信念については、「学習効力感」、「学習意欲」、「文法知識の学習の肯定」、「学習困難」、「自然習得の肯定」という 5 因子が抽出された。次に、学習環境が指示詞の信念に与える影響について分析した結果、JSL 学習者は、「学習効力感」、「自然習得の肯定」の信念が JFL 学習者より強い一方、JFL 学習者は「文法知識の学習の肯定」、「学習困難」という意識が JSL 学習者より高いことが分かった。これは学習環境が信念に影響を与える可能性を示唆している。最後に、信念と学習ストラテジーの関係について探ったところ、学習環境を問わず、「学習効力感」、「学習意欲」と「文法知識の学習の肯定」の信念と学習ストラテジーに正の相関、「学習困難」という信念と学習ストラテジーに負の相関があることが示された。このことから、指示詞習得に関する信念によって異なる学習ストラテジーが使用され、信念は学習ストラテジーの使用に関わることが窺われた。

本研究によって、指示詞の学習に関する信念、相違の学習環境による指示詞学習、使用の捉え方の変化、そして信念と学習ストラテジーとの関わりについて端的に明らかにされた。以下は残された課題である。

まず、質問紙に基づく研究は各学習者の独自の詳細な状況を把握するのには不向きで、学習者の自己申告も実際の学習行動を的確に報告するとは限らない。今後の調査では、観察法、面接法などを併行し研究を積み重ね､今回得られた結果を確認することが望まれる。なお、相関関係は因果関係ではないので、信念と学習ストラテジーとの詳細な因果関係を明らかにするために、日本語指示詞の学習前後で信念と学習ストラテジーとの変化があるかどうか縦断的な詳しい調査が必要であろう。また、指示詞に関する信念と指示詞の習得結果との間に関連があるか否かの検証も必要であろう。信念と指示詞の習得結果との関連がより一層明らかになれば、その結果を教育現場に還元できると期待される。

参考文献

安龍洙（2001)「日本語学習者の指示詞の使用意識にみられる特徴―韓国人学習者と中国人学習者を比較して」『第 2 言語としての日本語の習得研究』4 号、pp.5-22

安龍洙（2008)「韓国人学習者の指示詞の使用意識に関する一考察―指示詞のテストの後に実施した自由記述の分析から―」『茨城大学留学生センター紀要』6 号、pp.61-76

板井美佐（2000)「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について―香港 4 大学のアンケート調査から」『日本語教育』104 号、pp.69-78

岡崎眸（1996)「教授法の授業が受講生の持つ言語学習についての確信に及ぼす効果」『日本語教育』89 号、pp.25-38

小柳かおる（2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク

迫田久美子（1998)『中間言語研究： 日本語学習者による指示詞コソアの習得』渓水社

佐藤紀美子（2007)「台湾人日本語学習者のビリーフス」『留学生教育』12 号、pp.119-129

宋晩翼・迫田久美子（2004）「指示詞コソアの指導の現状と運用能力調査―韓国における日本語学習者を対象にして―」『日本文化学報』21 号、pp.75-86

孫愛維（2010）「学習ストラテジーが現場指示の習得に与える影響について―JSL 学習者と JFL 学習者との比較」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』2 号、pp.1-10

孫愛維（2011）「学習ストラテジーが現場指示の習得に与える影響について―JSL 学習者と JFL 学習者との比較」『東呉外語学報』33 号、pp.47-72

単娜（2003）「中国人学習者の指示詞コソアの習得に関する研究」お茶の水女子大学 2002 年度修士論文

服部美貴（2002）「台湾の日本語学習者の言語学習の『確信』について―台湾大学の学習者の場合」『東京家政学院筑波女子大学紀要』6 号、pp.169-183

堀越和男（2010）「留学がもたらす日本語習得上の効果―動機づけ・第二言語不安・学習ストラテジーからの分析」『2010 年度台湾日本語文学国際学術研討会』pp.213-220

向山陽子（2007）「文法学習に関する信念・態度、学習ストラテジー、学習成果の関連―暗示的帰納的指導のコンテクストの中で」『日本語教育論集』23 号、pp.17-32

李受香（2003）「第 2 言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較―韓国人日本語学習者を対象として」『世界の日本語教育』13 号、pp.75-92

林雅惠（2006）「台湾人日本語学習者における指示詞の習得研究―初級後半から中級前半にかけて」東呉大学 2006 年度修士論文

盧錦姫（2011a）「台湾の大学生の日本語学習ビリーフに関する調査研究―日本語教育改善のための基礎データ作成を考える」『東呉大学外語学報』32 号、pp.77-106

盧錦姫（2011b）「台湾の大学生の日本語学習ビリーフと学習ストラテジーに関する調査研究―日本語専攻者を中心として」『台湾日本

語文学報』30 号、pp.369-392

Barcelos, A. M. F.（2003） Researching Beliefs about SLA: A Critical Review. In Kalaja, P. & Barcelos, A. M. F （Eds.）, Beliefs about SLA: New Research Approaches, 7-33

Bialystok, E.（1981） The Role of Conscious Strategies in Second Language Proficiency. Modern Language Journal, 65-1, 24-35

Horwitz, E.K.（1987） Surveying Student Beliefs about Language Learning. In A. Wenden & J. Rubin （Eds.）, Learner Strategies in Language Learning. Cambridge: Prentice-Hall, 119-129

Horwitz, E.K.（1988） The Beliefs about Language Learning of Beginning University Foreign Language Students. Modern Language Journal, 72, 283-294

Charkova, K. D. & Halliday, L. J.（2011） Second and Foreign Language Variation in Tense Backshifting in Indirect Reported Speech. Studies in second Language Acquisition, 33, 1-32

Ellis, R.（1994） The Study of Second Language Acquisition. Oxford: Oxford University Press

Kern, R.（1995） Students' and Teachers' Beliefs About Language Learning. Foreign Language Annals, 28-1, 71-92

Lowen, S., Li, S., Fei, F., Thompson, A., Nakatsukasa, K., Ahn, S. & Chen, X.（2009） Second Language Learners' Beliefs about Grammar Instruction and Error Correction. Modern Language Journal, 93-1, 91-104

Nyikos, M. & Oxford, R.（1993） A Factor Analytic Study of Language Learning Strategy Use: Interpretations from Information‐Processing Theory and Social Psychology. Modern Language Journal, 77-1, 11-22.

Oxford, R. L.（1990） Strategy Inventory for Language Learning: What Every Teacher Should Know. NY: Newbury House. （宍戸通庸・伴紀子訳（1994)『言語学習ストラテジー―外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社）

Rubin, J.（1987） Learner Strategies: Theoretical Assumptions, Research History and Typology. In A. Wenden & J. Rubin （Eds.）, Learner strategies and language learning, 15-30

Sawyer, M. & Ranta, L. （2001） Aptitude, Individual Differences and Instructional Design. In P. Robinson （Ed.）, Cognition and second language instruction, Cambridge University Press, 319-353

Tanaka, K. & Ellis, R. （2003） Study-Abroad, Language Proficiency, and Learner Beliefs about Language Learning. JALT Journal, 25-1, 63-85

Wenden, A.L. （1987） How to be a Successful Language Learner: Insights and Prescriptions from L2 Learners. In A. Wenden & J. Rubin （Eds.）, Learner Strategies in Language Learning, Prentice-Hall International, Englewood Cliffs, 103-118

Yang, N.D.（1999） The Relationship Between EFL Learners' Beliefs and Learning Strategy Use. System, 27, 515-535

Yashima, T. & Nishide-Zenuk, L.（2008） The Impact of Learning Contexts on Proficiency, Attitudes, and L2 Communication: Creating an Imagined International Community. System, 36, 566-585

添付資料

5・病院で

医者：（患者の背中を押さえながら）

ここ、そこ、あそこ 痛みますか。

患者：ここ、そこ、あそこ はそれほどでも

ありません。



追記

本研究は、2011 年 11 月 4 日に行われた「2011 年台大日本語文創新国際学術研討会」の発表原稿に修正を加えたものである。本研究の修正にあたり、査読委員の方々、十文字学園女子大学の星野祐子氏と開南大学の平田真理子氏より貴重な助言を頂いた。厚くお礼申し上げます。なお、本研究は住友財団「アジア諸国における日本関連研究」の助成を受けて完成したことをここに記します。